――漢字（解字）朝礼を中心に――

三年生になると、それまでの「お話朝礼」にかわって、「解字朝礼」を行ないます。四月半ば頃、「先生、漢字朝礼は、まだやらないの」と聞きに来る児童が多くなってきました。それだけ漢字朝礼に対する関心が高く、お話の中に出てきた漢字を教えていくだけの「お話朝礼」とは違って、「どんなことをするのだろう」という期待感がうかがわれました。

しかし、絵と文字の中間に位置する解字を指導する側としては、まず漢字に興味、関心を持たせること、そして、漢字の成り立ち等について、少しでも子どもたちに理解して欲しいと願うとともに、逆にそのことができるかどうか不安でもありました。

「解字朝礼」を始めてひと月ほどして、「反」という字を教えた後、理科ノートに「県版」とあり、それに気づいて突然発表する児童がいるなど、少しは漢字に、目と心を向けてきてくれたようです。そういう児童を、ひとりでもふたりでも多くしていきたいと願っています。

（一学期）5 月 20 日　手　右　左（提出漢字）

T　何でしょう？

（板書）

C　手だ！

T　漢学で書くと、

（板書）

C　簡単だ。

T　絵と漢字、似てない？

C　どこが？……似ていない！

T　ほら、書いてみよう。

（板書）

C　骨だ！

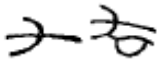
T　この手という漢字は、この形からきていることがわかるね。もっと簡単に書くと、

（板書）

T　この手は、身体の中で一番よく動くね。

C　食べる！　書く！　なぐる！

T　自由自在に動くことが出来るよ。いろいろな向きに動かせるね。

 （板書）

T　これは、なんだろうね？

C　右だ！

T　そうだね。右という字には、手の部分と、口の部分とがあるね。どうしてだろう？

C　……

T　あくびをする時、皆どうする？

C　あっ、手を口に当ててする。見られないようにかくす。

C　右は、口があくびをしていて、手を当てるところだ。

T　つぎにこれも手ですね。

（板書）

C　こんどは左かな？

T　はい。

（板書）

C　やっぱり左だ。

T　下の方のは何だろう？

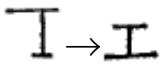
C　エだ！　エだ！

T　はい、説明しましょう。こんなの知ってる？

（板書）

C　大工さんが持ってるやつだ。

T　これがだんだん、こんなふうに変わったんだよ。定規はどっちの手にもつ？

 （板書）

C　左手だ。ああ、それで左になったのか。

C　よくわからない。どうしてそんなふうに変わるの？

T　はじめの字は上が大き過ぎて不安定だから、書きやすいように下を大きくしたんだよ。

C　ふーん……

T　もうひとつやってみます。何でしょう？

（板書）

C　ナだ！　手だ！

T　この手についている字を知っていますか？

C　大だ！

C　犬だ！

C　太だ！

T　「大」や「犬」や「太」は違いますよ。

C　友達の「友」だ。

T　そうだね。「友」と、それからもうひとつ。

（板書）

C　あッ、有線の「有」だ。

T　つぎは「友」と「有」を勉強しましょう。

5 月 27 日　友　有（提出漢字）

T　これは何だった？

（板書）

C　手だ！

T　そう。これがついている字は全部、手に関係があったね。

C　先生、質問！　「友」もですか？

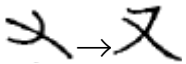
T　いい質問だね。もともとこの字はこう書いた。

（板書）

C　何だ、あれも手か。

C　あッ、手と手が握手している！

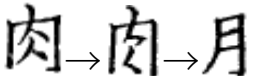
C　手をつないでいるんだね。
C　助け合っているんだ！
T　そうだね。仲良しさんは、手をつないで歩くね。
C　友達だから手をつなぐ。
T　友達が困っていると、助けに行ってあげるでしょう。
C　ウン、かばってあげる。
T　そう、それが友達だね。それでは、これも「手」だっていうことわかるね。

 →（板書）

C　はい。それから、有線の「有」にも手がある！
T　そうだね。上の方は手。じゃあ、下の方は？

（板書）

C　げつ！つき！
T　「有」の音読みはユウだ。訓読みでは？
C　「ある」だ！
T　そうだね。有の月は、もともとが肉で、こんなふうに変化していったんだね。

 （板書）

T　肉をもつ→「肉がある。所有」。大昔は、狩りに出かけてイノシシやウサギをつかまえました。
C　食べるため？
T　そう。そして、勤物の肉をつかまえて、「オーイ、ここに肉があったゾー」って、叫んで皆に知らせたんです。だから、訓読みでは「ある」って読むでしょう。
C　ああ、そうか。手で肉をひろったんだ。

6 月 3 日　取（提出漢字）

「又」がもともとは手の意味であることは、前の授業で学習しましたから、すぐにわかったようでした。そこでこんどは、「耳」と「又」を提示してみますと、「手で耳をおさえている」とか、「手で耳を取るのかな」などの声が上がりました。そこで、昔中国では、戦いに勝った者が相手の耳や手をとってその証拠としたので、「取る」という字ができたと説明してやりますと、すぐに納得してくれました。

しかし、「又」のつく字をさがさせてみましたが、これはなかなか出て来ませんでした。

6 月 11 日　受（提出漢字）

「友」や「取」の指導で、「又」は手であることが学習済みですから「受」の「又」にもすぐに反応がありました。「手で何かを受けるんだ」と、すぐ発言がありました。「冖」も手であることを図で表してやりますと、「手と手の中に何かある」「渡すんだ」という発表もあって、結局しっかりと受け取るという意味があることに落ち着きました。

そして、ふたたび「又」のつく字をきいてみましたところ、大坂城の「坂」、最初の「最」、飯塚の「飯」、温度の「度」、友達の「友」などが出てきました。この時に「後ろという字もだ」と発言があって、「夂」と「又」とはちがうことをその時確認したりしました。

「夂」は足に関係することをこの時は触れないでおきました。

6 月 17 日　反　板　坂（提出漢字）

「又」が手の意味だとすると、「厂」はものさしではないかという発言が多く出ました。

（板書）

そこで、こう板書したら弓がそっている状態であることに気がついてくれたのですが、元にもどるとか、逆という意味があることには気がつかなかったようです。

坂については「土がそるってどういうこと」と見当がつきかねたようです。

それで次のような図を描いてみました。

（板書）

この図を見ると「土を上へ上へ積み上げていくと坂になるんだ」ということがやっとわかってきました。

6 月 24 日　飯　最（提出漢字）

「飯」は、友達の名前から、先々週提示されていた漢字です。「食」と「反」の字がなかなか結びつかず発言があまり出ませんでした。

T　この字は？

最（板書）

C　最後！　最初！

C　野球なんかの最終回。

T　下の部分は前に勉強したね。

最（板書）

C　「取る」だ！

T　おやつなど食べない時には、布をかけて、ふせておくでしょう。そして、おなかがすくと、ついつい布を取って……

C　つまみ食い！

T　そう、つまみ食いはほんの少し取って食べるね、たくさんじゃなくて。ほんの少しとか、ちょっととか、一番少なく取るという意味があるんです。上の布がこう書かれたんです。

（板書）

C　あれはシワだな。

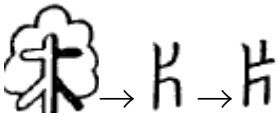
T　そして今は、一番……という意味によく使われるんです。

C　ああ、だから最初か。

今日は、取り上げた漢字が難しく、児童の発言が少なかったようです。

7 月 3 日　版　度（提出漢字）

「版」の字は「一班、二班のハン」とか「ハンコのハンだ」などと言って、見慣れない漢字に抵抗を感じている様子でした。しかし、つくりが「反」なので、「ハン」とすぐに読めました。

 （板書）

「片」は木を半分にした小さな切れはしで、印刷する板のことを版と

いうのだと説明しました。

T　この字はもともとは、こんな字だったんだ。

(板書)

C　なべだ！

C　たき火だ！

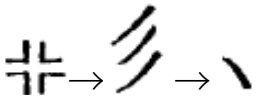
T　家の中でなべをかけて、火をたいているね。家の中で火を燃やす。昔はずっと火をたいていたんです。消えないようにね。そこから、一つ一つつながるとか、長さをはかるとかの意味になったんですね。

この字の指導の時、「■」は「まだれ」だとすぐに気のつく児童が数名いました。先週、今週と、難しい複雑な漢字が多く提出されたため、児童の発言が少なかったようです。

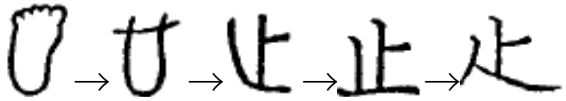
7 月 15 日　近　遠 (提出漢字)

手の指導が続いたことと、複雑な漢字を提示したことで、児童の意欲が、やや薄れてきたように思われたので、今月に入って「辶」の指導をすることになりました。

「今日は」と言った途端に、「また手じゃ」と不満の様子です。そこで「辶」を板書してやりますと意欲的になってきました。



(板書)



しんにゅうには、「行く」という意味があることを教え、「近」と「遠」の指導に入りました。

T　これは何でしょう？

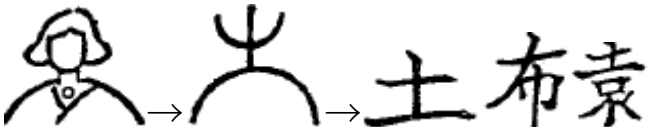
(板書)

C　木が折れている。

C　おのだ、おので切るんだ。

T　これに進む意味のしんにゅうをつけて、おのを近づけて行く。ものの近くまで行くという意味で、「近」という字。

こんどはこんな絵を描いてみよう。服をゆったりと着る。


(板書)

C　ゆっくりと行く。急がずに行く。

T　ゆったりと遠回りして行く意味で、「遠」ですね。

しんにょうのついた漢字はたくさん知っていました。「道」「遊ぶ」「通る」「達」「進行」「運ぶ」などです。

――一学期を振り返って――

冒頭にも書きましたように、児童たちは今までの「お話朝礼」から「解字朝礼」になって、どんなことをするのかとても楽しみにしていました。それに今後四年間続ける「解字朝礼」の始まりということもあって、

指導に不安がありましたし、どうしても慎重にならざるをえませんでした。

そこで、第一回目は、昨年の資料を見たり、研究部と相談したりして、「手」「右」「左」を提出することにしたわけです。

第一回を終えた後の児童の感想では、「お話朝礼」と「解字朝礼」とは全然違いました。「いろいろなことがわかっておもしろいです。手が右や左に関係があるなんて、はじめてわかりました」といったことをほとんどの子が書いており、文字そのものに意味かおることに驚いた様子でした。そしてそのことがより興味をそそり、関心を一層高めたようです。

そして二回目からは、「手」に関係した漢字で、児童がよく知っている字を提出した方が興味も湧くだろうし、意見もよく出て深まりのあるものになるだろうと考えて、児童から出た漢字を提示し、その成り立ちを指導してみました。しかし、どうも指導側が考えたほどの反応がなかったように思われます。それは児童が出した漢字でも、やや複雑な成り立ちの漢字を、あえて解字指導したことが原因していたと考えられます。

七月の終わり頃に、「解字朝礼」についての感想を書かせました。意味や成り立ちがわかって楽しい、漢字がお話朝礼の時より覚えやすい、といった感想がほとんどでした。

一方、少数ではありますが、次のような感想を持つ児童もいました。

- 一つの漢字をもっとくわしくやってほしい。
- むずかしくなってきた。もっと簡単な字を教えてほしい。
- 先生が一つの漢字を早く言われるから、むずかしい。もうちょっとおそく言ってもらいたい。そうすればわかります。
- いろいろな漢字を見つけないといけないからむずかしい。

提示する漢字は一回につき一つから三つでしたが、時間的なことを考えると、毎回一つに絞った方が児童の思考時間も十分に取れるし、効果的と思われますので、二学期からは原則として一つにすることにしました。つまり児童の実態と漢字の質的なものを考慮して提示していきたいというわけです。また子どもたちの感想はいずれも「指導法」で解決出来ることだと考えられます。

それから「こんな漢字を教えて欲しい」という希望も出てきました。たとえば、

- 私の名前の由紀の「由」をやって下さい。
- うかんむりとか、ごんべんも勉強したい。
- 「广」の勉強したいです。（自分の名前についている児童から）
- 自分の名前の漢字が知りたい。

というように児童にとって最も身近にある漢字、つまり名前にある漢字に格別関心を持っています。それは「手」のシリーズをやった時も、自分や友達の名前があがっていたことからもわかります。そこで二学期は「手」「足」に関連づけながら、児童の希望も取り入れていきたいし、また「解字朝礼」の時間だけでは、子どもの名前にある漢字の解字は無理なので、誕生日とか、あらゆる機会をとらえて指導したいと思っています。ますます漢字の成り立ちのおもしろさに触れ、漢字に対する興味を喚起していきたいと考えているところです。

「漢字貼り」については児童の感想をまとめてみたところ、貼る枚数が「多い」ということをほとんどの児童が書いていました。それでも何とか時間内に貼れる児童がほとんどで、出来ない者は各学級二、三名

というところでした。

三年生の漢字貼りの枚数は 50 枚を基準としており、これまでに貼る枚数が最も多い単元で 48 枚でした。その基準からすると、無理な枚数ではないのですが、二年生の時に比べて字が小さくなり、切ったり貼ったりするのに時間がかかることから「多い」と感じているようです。そこで、貼る枚数を 5 字から 10 字減らすことも考えてみましたが、児童が特に負担に感じている様子でもないし、学習を進めて行く上で支障をきたすほどでもないので、そのまま続けることにしました。おそらく慣れて来れば全員時間内に出来るようになるだろうと思います。

(二学期) 9 月 16 日　遊 (提出漢字)

しんにょうにはどんな意味があったのか、ほとんどの児童が忘れていました。しかし図を書いて説明しますと、すぐに思い出したようです。

「遊ぶ」の中にある「子」の字から連想して「子どもがあっちこっちに行って遊ぶんだ」などの発言がたくさんありました。

9 月 30 日　進 (提出漢字)

} 進 (板書)

進むという漢字であるということが思ったより早くわかったようです。

鳥は上手に飛ぶことから、前にうまく進み行くという意味になりました。

10 月 7 日　休 (提出漢字)

T　にんべんには、もともとどんな意味があるのかな？

C　人の意味。

T　そう。ではこれは？

(板書)

C　木だ！

C　わかった。休む、だ。にんべんに木だもん。

人が仕事をしていて、疲れたから木の陰で休むということに全員がすぐに納得しました。偏の中でにんべんは、児童にとってかなり身近なものだったようで、にんべんのつく漢字をたくさん発表してくれました。「健」「俊」(名前から)、「体」、「僕」、「仕」、「作」などです。

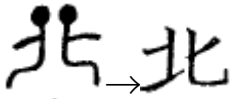
10 月 28 日　健 (提出漢字)

この漢字の中に以前習った「手」があると言いますと、不思議そうにしていましたが、解字をするとすぐに気がつきました。「聿」は手で何かを持っている、エンピツか筆かをまっすぐ持つ、という発表があり、「辶」(行く、歩く)「亻」(ひと)から、健康でなかったら、筆をまっすぐ持つとか、歩くとか出来ない、という発言が出ました。

友達の名前にある漢字は、やはり興味があるようです。

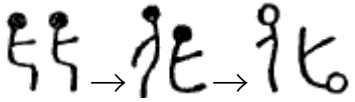
11 月 11 日　北（提出漢字）

T　さて、何だろう？

 （板書）

C　ひと！
C　坐っている、背中をむけて。
C　何で背中をむけていると北になるんだ？
C　北は、もとは背中の字なんです。寒いと人は太陽の方を向きたがる。そうすると背中はどっちの方に向く？
C　わかった。南の反対だ。
C　それで北か。

11 月 25 日　比　化（提出漢字）

 （板書）

同じ方向を向いているから、並んでいる二人を比べていることにはすぐ気がつきました。が、化けるという字については、なかなか納得がいかないようでした。

「匕」は人が倒れる形で、「化」は「人が倒れて死ぬこと」→「様子が変わる」→「ばける」と説明しました。「花という字は草が化けて花になったんですか」と最後に発言がありました。

12 月 2 日　見（提出漢字）

（板書）

この板書から、「見る」であることはすぐわかりましたが、「儿」も“ひと”であることに、「意外だ」という表情でした。

12 月 16 日　兄　元（提出漢字）

T　人に頭がつくと、何でお兄さんなんだろう？

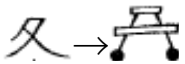
（板書）

C　兄弟の中で一番上で、大きいから。
C　えらいから、いろんなことを知っている。「元」は「儿」（ひと）と「二」（上）から、人の上の部分をさし、頭を意味して、転じて「先端」「最初」の意味になると解字しました。

（三学期）1 月 13 日　冬（提出漢字）

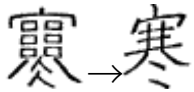
三学期は手や足や人にこだわらず、児童の興味をひきそうな漢字をいろいろやってみることにしました。

T　冬という字はどうやって出来たのだろう？

 （板書）

C　垣根に雪がつもっている。

C　何かひっかけている。
C　柿じゃない？
C　おいしくなる。
C　取っておく。
C　長持ちする。
C　わかった。食べ物を長持ちさせて、それをためておくと、冬にも食べられる。
T　そうだね。下の「冫」は何？　これはもとは「冫」だよ。
C　水に関係かある。
C　わかった。氷だ！
T　そう。「冫」は氷とか冷たいもののことです。冬から連想すること何？
C　寒い、雪、つらら、霜柱、こたつ、あられ、流氷、なだれ、雪だるま、かまくら、雪合戦、なだれ。
冬から連想するこれらの字について、漢字で書けるものを調べ、廊下の黒板に書いておくように指示しておいたところ、休憩時間にほとんど調べて書いてありました。
1 月 31 日　寒　雪（提出漢字）
T　さて、この字はわかるかな？

 →（板書）

C　あ〃、寒いだ。
T　この字を見て、気のつくことない？
C　冬と同じで、点々が二つ付いている。
C　氷だ！
C　冷たい！
T　これは何？

（板書）

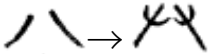
C　干すものだ。
C　ひげ！
T　では、これは？

（板書）

C　うかんむり！
T　では、これは？

（板書）

C　窓！　壁！
T　では、これは？

 （板書）

C　両手、手だったのか。
C　わかった。大風が来て、壁についたつららなんかを落としている。
C　そんなら何で、氷が下にある。
C　石がくずれないように手で支えている。寒いけど頑張って。
C　石と石のすき間を風が来ないように、手でふさいでいる。
T　そうですね。もう一つ。「冬」という字からいろんな言葉を出してくれたその中に、「雪」があったけれど、音読みはどうかな？
C　セツ！

C　下のヨが手で、雨は落ちてしまうけど、雪は手の上にのる。
T　そう、雪だったら？
C　つもる。
T　「雨」のつく漢字は？
C　霜、霙、雨、雲、電、雷、霧、霰。
T　どのくらいあるか調べてみたら、五十くらいありました。次の漢字は何て読むのか、調べて、また黒板に書いておいて下さい。雫、震、霊、霞、露、靄。

2 月 17 日　球　班（提出漢字）

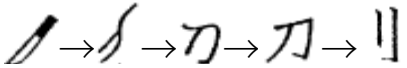
T　来週の水曜日には何かあるの？
C　卓球大会！
T　だれか漢字で書いて下さい。
C　はい！
T　球の訓読みは？
C　きゅう、たま、だ。
T　球のつく熟語は？
C　野球、直球、水球、地球、球技、変化球。
C　ボールという意味だ。
T　地球はボールじゃないよ。
C　わかった、まるいという意味。
T　そうですね。「求」はこういうことです。

（板書）

C　動物の皮でボールが作ってある。
T　そうです。ぎゅっとしまったボールという意味があるんです。
　つぎに王偏がついた字、知ってるかな？
C　一班、理科。
C　玲子。
T　ものを二つに分けるには何がいる？

（板書）

C　ほうちょう！　ナイフ！
T　そうだね。「■」は刀と同じ意味があります。



（板書）

C　班は玉を分けるという意味か！

2 月 24 日　開　閉（提出漢字）

　この字は四月、図書館指導の際、解字で指導を受けていたので、すぐに思い出しました。かんぬきを両手で持ち上げて、かぎをはずすから、「あく」で、閉はかんぬきを竹や捧で支えているなどと活発に発言していました。門がまえの漢字を廊下の黒板に書くよう指示したら、黒板いっぱいに調べて書いてありました。

――一年間をふりかえって――

　漢字朝礼は、まず「手」の指導からスタートをし、「足」、「人」シリーズへと進めていきました。そして、三学期に入ってからは、季節や学

校行事と関連させながら、児童の興味を引きそうな漢字を選んで指導していきました。

そして、とにかく欲張らないように心がけ、提出漢字は一つ、多くて三つにし、取り上げる部首も数をしぼり、手では「⺈」「又」「灬」「ヨ」「彐」、足では「辶」を、人では「⺊」「匕」「亻」「儿」を中心に指導してきました。

また必ず前の週に学習した漢字の復習をしてから、次の漢字へと進みました。忘れている児童も多いので、年間を通して、「漢字朝礼」でした既習漢字を教室内に提示しておくなどの方法も必要かと思われました。

「厂」ががんだれ、「广」がまだれであるとか、「辶」がしんにょう、「斤」がおのを表わしているなどに興味を持って取り組み、「漢字朝礼」を楽しみにしている児童ほど、漢字への知識も深いようです。また一年間の反省を書かせましたところ、「調べておきたいので、次の漢字朝礼では何の漢字をやるのか言っておいて欲しい」などと意欲的な子どももいました。しかし、はっきり「漢字は苦手」と言っている児童もおり、今後の課題であります。

「漢字貼り」については、教科書を一読した後に貼ることにしているのですが、個人差があり全部貼れない児童もいます。しかし、児童は「漢字貼り」に意欲的で、そこには早く貼り、早く終ろうとする競争心と、見たことのない漢字が読める面白さ（満足感）、そして教科書が漢字で一杯になる楽しさがあるからだろうと思われます。

ところが、時間内に貼り終わるのが精一杯で、貼りながら全文を読み通していくことには無理がありました。児童の多くは、貼り込み用にプリントされた漢字を単に教科書に貼るという作業をしているにすぎないようにも感じられるところがあります。幾度も読んだ後に全文を通して読み、思考しながら、時間をかけてゆっくり貼った方が効果的かもしれないとも思われます。

この一年間の漢字教育で感じたことは、子どもたちが辞典を引くことを苦にしないこと、どんな漢字を板書しても「習っていないから」と絶対に尻ごみしないこと、また“漢字貼り”も当たり前のこととして積極的に取り組み、“心の歌”を簡単に暗唱してしまうことでした。

これまでは、「三年生だからまだ辞典は早すぎる」とか、「習っていないなら平がなで」という考え方をしていました。しかし、この一年をふりかえってみて、われわれは子どもの能力を過少に評価していたことを反省せざるをえません。子どもたちは大人の想像以上の能力をだれもが持っています。「小学生だからこの程度で」と考えるのではなく、「小学生だからこそ今やらないと」と考えて、今後も頑張って、楽しい授業を展開して行きたいと思います。

（担当　足立真司・木次柴折）